The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	神戸アートアニュアル2003に参加して
Author(s)	高嶋, 麻衣子
Citation	臨床哲学のメチエ. 2004, 13, p. 36-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71175
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集3
神戸アートアニュアル からひろがった活動

イラスト　山本麻紀子

神戸アートビレッジセンター（通称KAVC）では、一九九六年から「神戸アートアニュアル」という展覧会を毎年秋に行っている。ここでは出展対象を関西在住の二十七歳未満あるいは学生にしぼり、出品作家たちの主体性を重視した独自のプログラムを実施することで、彼らの自己プロデュース能力のトレーニングを図っている。さらに二〇〇二年からは展覧会の企画と実行におけるインターンシップ制度を開始して、担ぎ手の育成にも取り組んでおり、アートマネージメントを実践的に学ぶことのできる貴重な場を提供している。

以下の記事は、この展覧会にインターンとして参加した半年間の報告と、そこで出会った出品作家の山本麻紀子さんによる寄稿、そして彼女の福井高校と洛星高校での授業の記録である。山本さんのアートは「毎日の生活の中でちょっと立ち止まり、いつもと違った視点で物事を捉えなおしてみる」ということがきっかけになっているが、それは哲学の始まりとも重なる所があるように思われて、授業を依頼してみようということになった。また、彼女はコミュニケーションをテーマにした作品を数多く制作しており、その点でも大いに示唆を与えてくれることと思う。

神戸アートアニュアル2003に参加して

髙嶋麻衣子

二〇〇三年の六月から約半年間、神戸アートビレッジセンターが主催する「神戸アートアニュアル2003 Grip the Gap」という展覧会に、私はインターンスタッフとして参加した。アーティストと観客のつなぎ手という役割ではあったが、そもそもその役割自体がなじみのないものであり、ましてや初めて顔を合わせた9人のスタッフと歩調を合わせての共同作業ということで、当初はかなり戸惑いがあった。

このインターン制度は、関西の若手アーティストのための展覧会として今年で9年目を迎える「アートアニュアル」という企画の中で、アートマネージメントを学ぶための機会として一昨年から実施されおり、展覧会の企画のほとんどに関わることができる。そのため同じインターンとして参加しているのは多くが芸術大学の学生、あるいは将来アートに関わる仕事がしたいと考えているメンバーで、その中で哲学専攻の自分が何をできるのかということはつねに考えさせられた。しかもメンバーの中には自分で何度も展覧会を企画している人もいるので、そういう経験がゼロに等しい自分には目立つアピールポイントがなく、初めは何とか無理やりでも自分の知識を役立てることはできないかと考えていた。しかし、そう考えれば考えるほど何事もうまくいかず、結局この方法はあきらめることにした（というか、あきらめざるを得なかった・・・）。そして辿り着いたのは、「開き直る」という方法だった。つまり、自分には実践的な知識や経験として役立てるものは何もないと開き直って、インターンに応募したはじめの動機だけ持ち続けるという方法である。私は単に以前から美術に興味があって展覧会に行くことも大好きだった、だから一つの展覧会ができるまでを横で見るだけではなく、何らかの仕方で関与できるというこの機会に内部に入ってみたい、そういう単純なことが今回インターンに参加した動機だった。そしてとにかく私はこの動機を忘れずにインターンに取り組もうと思い直したのである。

そうして色々な活動に参加しているうちに、一つ興味深い出来事があった。それは、インターン

の企画を主催者の方に持っていった時の出来事だった。インターンは全体での会議の他に、インターンだけのミーティングをもって自分たちの企画として何がしたいかということを話し合っていて、そこでは広報活動の充実ということも、様々な形の案として出てきていた。始めに出ていた案の中には、より多くの人にアートアニュアルという展覧会を知ってほしいということで、幅広い対象を見据えたものもあった。だが、その案を主催者側との会議に持っていった時、主催者の方から自分たちのいる場所をもっと見直してみてはどうか、という指摘をもらった。そしてこの指摘が、私にとってはまさに目からうろこの指摘だった。というのは、その視点は臨床哲学で現場とは何かということの議論になった時、現場は学校や病院といった特別な外だけにあるのではなく、自分のいるまさにその場所が現場になるという考え方と重なるものであったからだ。それにこの時の私はとにかく今自分がいるこの場に集中しようと思っていただけで、もう臨床哲学がどうということを考えるのはほとんどやめにしていた。だから少し前の自分が欲していたようなものがあきらめた途端にやってくるという事態そのものも、本当に驚くべきことだったのである。主催者の方が指摘した「自分たちのいる場所」とは、「学校」に一番近い立場である、といった自分についての基本的な情報が埋もれている場所のことであり、それは、自分にとってはごく当たり前のもの、展覧会の仕事ということとかけ離れた、大して役に立たないものとして見過ごしていた自分の情報だった。しかし考えてみれば大学という場所は、主催者側はせいぜいポスターやチラシを送るだけで、その中でそれが十分な効果を発するように置くことや、作家たちと同世代の人達に直接訴えかける機会というものは持っていない。つまり自分にとって見落とすほど身近な所に、自分の力を活かすことができる重要な要素が隠れていたのだった。そのような経緯から、今回のインターンの広報活動は学校での宣伝を含めた草の根的なものにしようということになった。そしてこの経験は、自分にはどんな働きができるのかということを考える時、まずするべきは自分の持っているものや自分が今いる場所を客観化してみることだということ、そういう当たり前のことを「実感」として感じることができたという、私にとって大きな意味を持つものとなった。

SDや哲学カフェをやりたい、哲学的な意見がほしい、ということで私はこの展覧会に招かれたわけではなかった。自分の興味一つで飛び込んでいってしまっただけである。しかし特別な立場を与えられず、十人のスタッフの一人としての働きを求められたということに意味があるのだと思う。私は哲学をする者としてはこの場所に何も成果をあげられなかっただろう。だが、少なくとも形の面で、アートをしている人も、哲学をしている人も、同じ土壌に立って同じものを作るということくらいは、この展覧会に残せたのではないかと思う。作家やインターンの中にはなぜ哲学科の学生がアートマネージメントを学びに来ているのかと思う人もいたかもしれない。私も特に哲学科の学生として何かを残せたとは決して思っていない。だがこの展覧会が純アート化することに対して、一つの手助け(邪魔?)はできたかもしれないとは思っている。作家の人やインターンに、「変な感じ」を持ってもらえたらそれでいいと思うのだ。とはいうものの、振り返ってみて大切だったのは、私のいる場に集中すること、それだけだった。だからこそ、ここで欲を出して「変な感じ」が「いいかんじ」になるのを目指したい、というようなことは言わない方がいいはずだ。(たかしままいこ)